

# アダム・スミスにおける経済成長の意義

——社会福祉との関連で——

- 一 はじめに
- 二 道徳哲学の基底にある幸福論
- 三 道徳哲学における経済学の位置
- 四 経済成長の目的
- 五 理不尽な重商主義の諸政策
- 六 むすびにかえて

山口 正 春

## 一 はじめに

アダム・スミスが活躍したのは、どんな時代か。当時の情勢は、彼の関心や所説にどんな影響を与えたのか。こんな疑問を念頭に、彼の取り組んだ時代の問題を見てみよう。もちろん時代の問題という場合、具体的には数多くのさまざまな問題を挙げることができよう。だがスミスの活躍した時代の歴史的特質に注目するならば、問題は次の三つに要約できるであろう。第一は、イングランドとスコットランドの経済的格差の問題、第二は、重商主義体制の行き詰まりとその打開の問題、第三は、以上の二つと深く関連する、いわば階級的貧困の問題である。<sup>(1)</sup>

第一に関連して言えば、当時のスコットランドの農村では古い中世の農村共同体の制度が、ほとんどそのまま維持されていた。ハイランドには氏族制が、ロウランドには封建制が根強く残っていた。こうした状況から農具の幼稚さ、収穫の低さ、耕作者の地位の劣悪さを容易に想像しうるであろう。<sup>(2)</sup> スミスはオックスフォードに留学する途中、イングランドの農地がよく整備されているのに目を見張ったと言われている。<sup>(3)</sup> こうした遅れの自覚は「追いつき、追いこせ」という意識を生んだ。これが、活発な文化活動を生み、スコットランド啓蒙思想家と呼ばれるフランスの啓蒙思想家に匹敵する重要な一群の思想家を生み出したのである。

先進国イングランドに対する後進国スコットランド、こうした発展段階の異なった部分を目前にしたことが、スコットランド啓蒙思想家に特徴的な鋭く豊かな歴史感覚を形成したのである。スミスもまた、鋭く豊かな歴史感覚をもって豊かさへの道を模索するのである。

では第二に関連して、問題の中身はどのようなものか。重商主義者は富を金銀などの貴金属と考え、国を豊かにす

るためには貿易統制を用いて、できるだけ多くの貴金属を自国に流入させることだと考えた<sup>(4)</sup>。しかしこの政策体系は、国内市場の開発よりも国外市場の拡大に力点を置き、対外的には力による植民地の獲得、国内的には低賃金という方向を追求した。富国強兵である。オランダやフランスも対外膨張政策を採ったから、しばしば戦争が起つたのも当然である。戦争の繰り返しは、当然財政負担を増大させる。この重商主義政策を重荷と感じはじめていた人々、とりわけ新興ブルジョアジーの気持ちを反映して、スミスは重商主義の理論と政策の問題性を根底から暴き出すこと、そしてそれに代るべき方向を示すこと、これが彼に投げかけられた課題であった<sup>(5)</sup>。

さて最後に、第三の貧困の克服の問題に触れておこう。この問題は、上述の二つの問題と深く関連している。イングラントに対するスコットランドの経済的遅れについては、すでに触れた。それは、いわば経済の発展段階の違いによるものであった。しかし、もう一つの階級的貧困と呼ばれるものがある。一七世紀以降、大規模農場を生みだした土地の「囲い込み」によって、土地を奪われた農民が新興の産業都市に流れ込み、これらの人々は産業労働者のプールになると同時に、近代のスラムを形成するようになったのである。

この土地の「囲い込み」は、広く資本制農業を成立させたもので農業革命とも呼ばれ、一七六〇年代から産業革命に並行して進行した。まだ機械制大工業の下での悲惨な光景は見られなかったけれども、こうした、いわば資本主義の成立とともに生ずる階級的貧困の問題をスミスが視野に入れたことは間違いない<sup>(6)</sup>。バカンもスミスは「社会の中で最も貧しい階級に対する関心が強かった」と記している<sup>(7)</sup>。

以上、スミスが取り組んだ問題の中から、小論では、第三の階級的貧困の問題を取り上げ、彼が如何に貧困問題を解決しようとしたかを検討してみようと思う。より具体的に述べるならば、スミスの道徳哲学の根底にある彼の幸福

論を踏まえ、スミスが当時、社会の大多数の人民が貧困に陥ってしまっている原因は、どこに由来すると見たか、そして貧困状態を解消し富裕社会を実現することによって、大勢の人々の福祉向上に寄与するには如何なる方策があると考えていたのか、こうした課題に主として焦点を当て、スミスの見解を紙幅の許すかぎり明らかにしてみたい。

- (1) 鈴木亮「アダム・スミスの時代と学問」『経済』、第一四六号、新日本出版社、一九七六年、浜林正夫・鈴木亮『アダム・スミス』、清水書院、一九九六年、I章、中谷武雄『スミス経済学の国家と財政』、ナカニシヤ出版、一九九六年、第二章、内田義彦『経済学史講義』、未来社、一九九五年、三章などを参照されたい。
- (2) 水田洋『アダム・スミス研究』、未来社、一九七五年、三四―五頁。
- (3) John Rae, *Life of Adam Smith, with an Introduction "Guide to John Rae's Life of Adam Smith" by Jacob Viner*, 1977, p.18. J・レー『アダム・スミス伝』（大内兵衛・大内節子訳）、岩波書店、昭和四七年、一二頁。
- (4) 内田義彦、前掲書、三六―四〇頁を参照。
- (5) 内田義彦『新版 経済学の生誕』、未来社、一九九四年、六七―九一頁を参照。
- (6) 鈴木亮、前掲論文、二一―八頁。
- (7) ジェイムズ・バカン『真説アダム・スミス…その生涯と思想をたどる』（山岡洋一訳）、日経BP社、二〇〇九年、一三頁。

## 二 道德哲学の基底にある幸福論

一七三七年、一四歳でスミスはグラスゴウ大学に入学したが、<sup>①</sup>彼が最も深い関心をもって研究したのは道德哲学であつて、このことは彼がグラスゴウ大学在学中「スコットランド学派の父」と呼ばれたフランシス・ハチソンの影響

によるものである。<sup>(2)</sup>

啓蒙の時代にあつて、スコットランドにある大学の道徳哲学の講座は、まさにスコットランドの学問と思想を代表する講座であり、したがつて道徳哲学は際立つて重要な学問であつた。<sup>(3)</sup> このスコットランドを代表する道徳哲学の講座が、はじめて設けられたのは一七〇八年エディンバラ大学においてであつて、続いて一七二七年にはグラスゴウ大学、その他アバディーン大学やセント・アンドリューズ大学に設けられ、当時、進歩的学者がこれを担当して学生の人気を集めた。<sup>(4)</sup> 一九世紀になると社会諸科学が分化し、専門化がいつそう進むのであるが、一八世紀には、人間と社会の全般を対象とする包括的な学問としての道徳哲学が存在したのである。

さてスミスは、一七五二年に病死したトマス・クレイギーに代つて道徳哲学の講座の担当者となつたが、<sup>(5)</sup> スミスの弟子で、後にグラスゴウ大学の法学教授となつたJ・ミラーが伝えるところによると、スミスの道徳哲学の講義は四部に分けられていた。<sup>(6)</sup> すなわち第一部門の自然神学、第二部門の倫理学、第三部門の法学、第四部門の経済学である。<sup>(7)</sup> これらの四部門のうち、自然神学については全く手掛かりが残されていないが、倫理学は『道徳感情論』に結実し、経済学は『国富論』に発展した。法学については、学生がとつたノートが後に二冊発見されて、一冊は一七六二年〜六三年の講義ノート（Aノート）であり、もう一冊は一七六三年〜六四年の講義ノート（Bノート）と推定されるものである。これらのノートからスミスは五九年に『道徳感情論』を刊行してからは、道徳哲学の講義の力点を、本来の道徳哲学はこの著作に任せて、法学に移していたことが分かり、また経済学は、まだ未成熟な形で法学の中に包摂されていたが、<sup>(8)</sup> やがてこの法学に関する講義の一部が経済学として自立することになるのである。

ところで上述のように、スミス自身の残した第一部門の自然神学関係の資料文献は皆無であるが、これを他部門の

スミスの言葉から次のように推定できるであろう。スミスの自然神学<sup>(9)</sup>は、神の存在とその諸属性に関する学問であるが、スミスは宇宙の創造者たる神の存在を信じており、神そのものは否定しないが、それ以外の日常生活においては神や教会を必要としない、いわば冷やかな理性的宗教である<sup>(10)(11)</sup>。この点、ラファエルは次のように述べている。「スミスは恐らく理神論者であつたらう。彼は他の多くの啓蒙思想家と同じく、観察しうる自然こそ神の存在を信じるに足る理由を提供するものであると考えた。自然の過程についてのスミスの説明は、神学から何らの支援も必要としない、自称の科学的企てとして読むことができる」<sup>(12)</sup>。

『道徳感情論』に見られる「神聖な設計者」「偉大な技師」「宇宙の管理者」「全知の存在」「自然の創造者」などの用語は、すべてこのような創造主としての神を意味していた。たとえばスミスは次のように述べている。「宇宙のすべての住民が、最も偉大なものと同様に最もつまらぬものも、あの偉大で慈愛深く全知の存在<sup>(13)</sup>の、直接の配慮と保護のもとにある」<sup>(13)</sup>と。このスミス自身の立場は、恐らくニュートンの立場から影響を受けたと思われる<sup>(14)</sup>。新宇宙観で一世を風靡したニュートンから当時の啓蒙知識人は、多大の恩恵を受けたのである<sup>(15)</sup>。ニュートンの業績、とりわけ天体物理学の業績は、スミスおよび同時代の多くの啓蒙知識人に類推<sup>(16)</sup>の豊かな源泉を提供したという理由で重要であった<sup>(16)</sup>。スミスも含めて多くの啓蒙知識人にとっては、ニュートンは自然という大宇宙を一つの首尾一貫した体系として提供したように思われた<sup>(17)</sup>。スミスは、このニュートンの体系を人間社会に類推し、適用したと想像できる。スミスは「人間社会は、われわれがそれを一定の抽象的で哲学的な見方で眺めるときは、その規則的で調和ある運動が無類の快適な効果を生みだす、偉大で巨大な機械のように見える」<sup>(18)</sup>と述べている。

ところで、さらに重要なことはスミスにあっては、神は単に宇宙を創つただけではないと言うことである。この神

は全被造物の幸福を願って慈悲深く見守っており、個々の人間の自由な活動に対しても全体として最大の幸福と調和を与えるべく計らっている。<sup>19</sup>したがってこの神は宇宙に住むものに対して、限らない仁愛を注いでいるのである。彼はこれを普遍的仁愛と名づけているが、恩師ハチスンの影響が窺われるのである。<sup>20</sup>こうした見解をスミスは次のように言っている。「宇宙という偉大な体系の管理運営、すなわち、すべての理性的で感受性のある存在の普遍的な幸福についての配慮は、神の業務であって人間の業務ではない。人間に割り当てられているのは、ずっとつまらない部門であるが、しかし彼の諸能力の弱さと彼の理解の狭さには、はるかに適切なもの、すなわち彼自身の幸福について、彼の家族、彼の友人たち、彼の国の、幸福についての配慮である」<sup>21</sup>と。

だから被造物たる人間は、神の広大な仁愛を信じて、彼はただ自らの幸福や周囲の幸福だけを考えてこれを追求すればよいのであって、そのことがまた、創造主である神の意志にも叶うことなのである。こうして、ここには神と人間との自然的分業が説かれるのであるが、これこそは分業論の経済学者スミスにとって、真に相応しい起点をなすものである。スミスは言っている。「人類の幸福は、他のすべての理性的被造物の幸福と同様に、自然の創造者が彼らに存在させるようになったときに意図した本来的な目的であったように思われる。……創造者の無限の諸完成についての抽象的な考察に導かれて、われわれが到達するこの意見は、自然の諸作用の検討によって、なお一層確認される。それらの作用はすべて、幸福を促進し、悲惨に対して防衛することを意図されているように思われるのである。われわれの道徳的諸能力の指図に依じて行為することによって、われわれは必然的に、人類の幸福を促進するための最も効果的な手段を追求するのであり、したがってわれわれは、ある意味では、神的存在に協力して、神慮の計画をわれわれの力の及ぶかぎり推し進めるのだと言っている<sup>22</sup>いいのである」と。

こうしてスミスの自然神学は結局、人間の自己中心的幸福の追求が神慮によって、人類一般の普遍的幸福に結びつくという、極めて楽観的な調和観へと導かれていくのである。スミスのこの宗教的楽観主義は、前述した彼の恩師ハチスンからの継承であろう。この点、ジョン・レーは次のように述べている。「ハチスンは新時代に属していた。それは、導きの手を自然の光のうちに求め、それによって一八世紀の最良にして恵み深き神を発見した時代であった。すなわち神とは、人類の福祉のためにのみ生き給うものであり、神の意志は神秘的な奇跡や摂理から知られるべきものではなくして、人類のより大なる利益―最大多数の最大幸福―についての広汎な考察によって知られるべきものだったのである。<sup>(23)</sup>」

いずれにしても、スミスの自然神学にあつては、人間の現世での幸福追求活動⇨利己心の発動が神慮によって、人類の現世での幸福に結びつくという、楽観的態度が顕著に現れている。この点、大道安次郎は「この幸福論が第一部門の中核的な地位を占める」と同時に、「この幸福論が道德哲学全体に対してもケルンをなすもの<sup>(24)</sup>」としている。『国富論』においても、古代ギリシャ哲学に自らの思想の拠り所を求め、中世哲学への徹底的な批判にも見られるように、スミスにあつては、現世における人間の幸福が最も重要で彼の道德哲学の眼目であつた。<sup>(25)</sup>

彼にとって、人間の幸福の基礎は生、存、つ、ま、り、生、き、る、と、い、う、こ、と、で、あ、つ、た、し、そ、れ、が、人、間、の、本、能、で、も、あ、つ、た。スミス自身は次のように言っている。「自己保存と種の増殖は、自然が、すべての動物の形成にあたって意図したように思われる、大目的なのである。人類は、それらの目的についての欲望と、その反対物への嫌悪を与えられている<sup>(26)</sup>」と。スミスが生存と本能を、来世の幸福よりも重視したのは、彼がルネサンス・ヒューマニズムの後継者だったからであり、彼の古代文化への尊敬も、人間の本来の姿を古代文化の中に見たヒューマニストの態度と共通のものをもつてい



たからである。<sup>(27)</sup>

- (1) 山崎怜『アダム・スミス』(イギリス思想叢書⑥)、研究社、二〇〇五年、二六頁。
- (2) 難波田春夫『スミス・ヘーゲル・マルクス』(講談社学術文庫)、一九九三年、二六頁。
- (3) 田中秀夫『啓蒙の射程と思想家の旅』、未来社、二〇一三年、九二―二頁、同『スコットランド啓蒙とは何か…近代社会の原理』、ミネルヴァ書房、二〇一四年、三二―四頁を参照。
- (4) Cf. W.L.Taylor, *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith*, 1965, ch. 1, 2. W・L・テラー『ハチスン・ヒューム・スミス…経済学の源流』(山口正春・川又祐訳)、三恵社、二〇〇七年、第一、二章を参照。
- (5) 水田洋、前掲書、九二頁。
- (6) 大道安次郎『スミス経済学の生成と発展』、日本評論社、一九八八年、二六―七頁、新村聡『経済学の成立』、御茶の水書房、一九九四年、第六章を参照。
- (7) Cf. Dugald Stewart, "Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL.D." in *Essays on Philosophical Subjects*, edited by W.P.D. Wightman, J.C.Bryce, and I.S.Ross, Glasgow Edition, 1980, pp.274-5. デューゴルド・ステュアート『アダム・スミスの生涯と著作』(福鎌忠恕訳)、御茶の水書房、一九八四年、一一―二頁を参照。
- (8) 浜林正夫・鈴木亮、前掲書、五〇―一頁、一一九―二〇頁を参照。植村邦彦『近代を支える思想…市民社会・世界史・ナショナリズム』、ナカニシヤ出版、二〇〇一年、四五頁。
- (9) 理神論ともいふ。
- (10) Cf. A.L.Macfie, *The Individual in Society: Paper on Adam Smith*, 1967, ch.3. マクフィー『社会における個人』(舟橋喜恵・天羽康夫・水田洋訳)、ミネルヴァ書房、昭和四七年、第三章を参照。
- (11) 大河内一男は「理神論ないし自然宗教は、一八世紀の啓蒙期に固有の信仰というよりは神の理解の仕方だったと言ってよ

- かった」と述べている。(大河内一男『アダム・スミス』(人類の知的遺産<sup>④</sup>)、講談社、昭和五四年、四二三頁。)
- (12) D・D・ラファエル『アダム・スミスの哲学思考』(久保芳和訳)、雄松堂出版、一九八六年、四一―二頁。
- (13) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D.D.Raphael and A.L.Macfie, Glasgow Edition, 1976, p.235. (以下、*TMS*と略記)。水田洋訳『道徳感情論』、筑摩書房、一九八一年、四七〇頁。(以下、邦訳と略記。ただし訳文は必要に応じて変更した箇所がある。)
- (14) David A. Reisman, *Adam Smith's Sociological Economics*, 1976, pp.42-3.
- (15) ケネス・ラックス『アダム・スミスの失敗…なぜ経済学にモラルがないのか』(田中秀臣訳)、草思社、一九九六年、二三頁。
- (16) Ian Simpson Ross, *The Life of Adam Smith*, 1995, pp.98-102. I・S・ロス『アダム・スミス伝』(篠原久・只腰親和・松原慶子訳)、シュプリンガー・フェアラーク東京、二〇〇〇年、一一〇―一二頁。
- (17) J.Ralph Lindgren, *The Social Philosophy of Adam Smith*, 1973, pp.4-6.
- (18) *TMS*, p.316. 邦訳、三九九頁。
- (19) 大道安次郎、前掲書、六八頁。
- (20) 田中正司『アダム・スミスの自然神学』、御茶の水書房、一九九三年、一六五―八頁を参照。
- (21) *TMS*, p.237. 邦訳、四七二頁。
- (22) *TMS*, p.166. 邦訳、二二四―五頁。
- (23) John Rae, *op.cit.*, p.12. 邦訳、一五頁。
- (24) 大道安次郎、前掲書、七九頁。
- (25) 美馬孝人「労働者状態論…スミスとマルクス」『北大経済学』第一三三号、北海道大学大学院経済研究会、一九六八年を参照。
- (26) *TMS*, p.77. 邦訳、二二〇頁。

### 三 道徳哲学における経済学の位置

さて、それでは先にも触れたように、スミスが彼の道徳哲学の講義の重点を第一部門の自然神学から第四部門の経済学、就中、第二部門の倫理学から第三部門の法学を經由して最後に第四部門の経済学へと移していったのは何故なのか。スミスにとって、どのような意図があったのであろうか。

高島善哉は、これを「スミス自身の思想の発展であり、スミス自身の論理の発展だった<sup>1)</sup>」という。そしてスミスのこの移行のライトモチーフは、彼の幸福論であり、その発展であったことを見逃してはならないと説く。大道安次郎もまた、スミスの道徳哲学講義の重点の移行を彼の幸福論の深化発展として捉える。大道安次郎は以下のように言及している。少し長文になるが引用しよう。

「ところで幸福とは彼〔スミス―引用者〕において如何なるものであったか。『幸福は平静と享樂とから成り立っている。平静なしには享樂はありえないし、完全な平静があるところには、どんな物事でも、それを樂しむことができな<sup>2)</sup>いようなものはめつたにないのである』このように幸福は平静と享樂より成っており、平静がプリマートを占めているが―事実、彼の幸福概念は極めて精神的なものを含んでいる―、しかし享樂もまたその構成要素を成していることに注意しなければならない。幸福はいわば精神的な要素と物質的な要素とより成っており、前者がプリマートを占めてはいるが、しかし後者もまた構成要素として認められているのである。この後者こそ経済的なものと連なるも

のなのである。彼は富を『すべての生活上の必需品および便益品<sup>③</sup>』として捉えているところから推測して経済的なものを如何に考えているかを窺い知るとともに、それが享樂の対象をも成していると言い得るのである。しかしここで注意しなければならぬことは、現実の幸福、平静な境地は、こうした享樂を欠くことによって社会の大多数の人々が著しく阻止されている状態にあること、従つて幸福達成のために経済的なものを尊重する必要のあることを積極的に主張している点である。経済学の大きな仕事は消費の低廉を図り且つまた生産を振興することにあると言っていることから、このことを窺い知るのである。いわば経済的なものは平静への手段として捉えられているのである。<sup>④</sup>

大道安次郎と同様の見解を、水田洋は次のように言及している。「この世での幸福は、確かに精神的なものを含むけれども、その精神的幸福を享受するためにさえ、人間は生きていかなければならないのだから、生活資料の調達という物質的な条件を確保しなければならぬ。だから生活資料が豊かに得られるという物質的な幸福を無視することができないのである。<sup>⑤</sup>」こうしてスミスの経済学は、人間の幸福の一要因たるこの物質的な条件<sup>⑥</sup> 享樂手段を、いかに豊富に人民に提供するかを課題とすることになる。

だから『国富論』第四編「政治経済学の諸体系について」では、スミスは既存の経済学史、経済思想史を検討し、自分の経済学的な立場を明確に打ち出している。彼の政治経済学の目的は、極めて明瞭である。すなわち「その第一は、国民に豊かな収入もしくは生活資料を供給することである。つまり、もつとはつきり言えば、国民にそうした収入や生活資料を自分で調達できるようにさせることである。第二は、国家すなわち公共社会に対して、公務の遂行に十分な収入を供することである。だから政治経済学は、国民と主権者の双方をも富ませることを目指している」<sup>⑥</sup>

と。君主、貴族、富裕階層の利益ではなく、大多数の人民、国民大衆の生活の安定・向上つまり福祉向上を目指すことが、政治経済学の目的であるとはつきり述べられている。スミス経済学の真骨頂を示す宣言であり、国民経済学の成立と言ってよいであろう。<sup>(7)</sup>

それはそうと、先にも触れたように、一七世紀以降、農業では穀物の増産を図るため、新しい生産技術が取り入れられ、休閑のない耕地、新しい作物の輪作、作物と家畜のより密接な結びつきをもたらしたが、何よりもそれを可能にしたのは大規模農場を生み出した「囲い込み」であった。「囲い込み」こそが従来は居住農民たちの共同地となっていた土地を解体し、土地を商業用に使用できるようにして大規模農場を造りだし、他方「囲い込み」によって多数の土地を保有しない農民を生みだし、貧窮化させ、この貧困な農民こそが資本主義の成立に必要な工場労働者として、過酷な労働を強いられたのである。<sup>(8)</sup>そして年を追って貧困層の規模は、絶体的にも相対的にも増大していった。<sup>(9)</sup>たとえばロンドンでの貧困層のスラム街について、ウィリアム・ホガースの一枚の銅版画「ジン横丁」は、この様子を象徴的に描いている。「ジン横丁」は、一八世紀における貧困層の生活の一面を切り拓いて見せてくれている。<sup>(10)</sup>

明日の生活にも困る多くの貧困者が巷に溢れているような状態をスミスは、何としても改善したかったのだ。スミス自身は『国富論』の中で、次のように述べている。「人民の圧倒的大部分が貧しく惨めであるとき、その社会が隆盛で幸福であらうはずは決してない。それに、人民全体を食べさせ、着させ、住まわせるこれらの人々が、自分自身もかなり十分に食べたり、着たり、住んだりするだけの、自分自身の労働の生産物の分け前にあずかるのは、全く公正なことなのである」<sup>(11)</sup>と。引用文から分かるように、スミスの生きた時代は、人民の圧倒的大部分が貧困であり、彼

のいう「生活上の必需品および便益品」は生活の物質的基盤を入手できない窮乏状態にあった。深刻な生活物資の不足に陥っていた。現代の先進諸国に見られる生活物資の溢れた状況とは対照的であった。

スミスはイングランドやスコットランドで資本主義の成立とともに生じた階級的貧困、具体的には貧民の置かれている悲惨な状況、貧困の悪影響・害悪などについて多くの事例を挙げているが、そのいくつかを見てみよう。「フランスでは、さらにフランスよりも労働に対していくらかよい報酬が支払われているスコットランドでさえ、労働貧民は祭日や特別の日以外には肉を滅多に食べない。」<sup>12</sup>「いまでもスコットランドの多くの地方では、小屋住み農と呼ばれる一群の人々が暮している。……この人達は、地主や農業者にとって一種の通いの使用人である。……彼らはごく少ない報酬と引換えに、自分の余分な時間を誰れにでも喜んで提供し、他の労働者よりも少ない賃金で働いていた。」<sup>13</sup>「貧困は……子供たちの養育にはすこぶる不都合である。……スコットランドのハイランド地方では、一人の母親で二〇人もの子供が生れても、そのうちの二人とは生きていない、と言うことも珍しくはない。……ある地方では、生まれた子供の半分が四歳になるまでに死に、多くの地方では七歳になるまでに、また大抵の地方では九歳か十歳になる前に死んでしまう。こうした高い死亡率は、主として庶民の子供たちの間で至る所で見出される。」<sup>14</sup>「貧困者の子供たちが教育のために割ける時間は、ほとんどない。彼らの両親は、幼い彼らをさえ養いかねるくらいなのである。働けるようになるやいなや、彼らは自分の食い扶持を稼ぎ出せるような、何かの職業に身を入れざるをえない。」<sup>15</sup>

このように社会の圧倒的大部分を占めている労働者、職人、使用人などの人民の暮らし向きが悪く、生活水準が低い状態は、人民の大部分が困窮しているわけで、そんな社会が幸福であろうはずはない。人民の大多数の暮らし向きが困窮状態に陥っていれば、その人民は富裕の恩恵を享受していないのである。スミスにあっては富裕国とは、生活

物資が豊富に人民に行き渡っている国にはかならない。富を金銀などの貴金属だとし、国を豊かにするためには貿易統制を用いて可能な限り、多くの貴金属を自国に流入させることだと考えた重商主義者と違って、スミスは人々が労働によって作りだす生活物資が、真の国民の富であると考えたことは前に述べたとおりである。言い換えれば、貿易差額として蓄積される金銀などの貴金属が富ではないし、軍事的・政治的な国力の強大さが国富でもなく、国民の年々の労働が生みだす生活上の必需品と便益品つまり生活物資の豊かさこそが、その国の富なのだという主張である。<sup>16</sup> スミスは富の概念に関して、コペルニクスの転換を行ったのである。

そこで本当に重要な課題は、真の富である生活物資の総量をその分配にあずかるべき人民の総数に比べてはるかに多く生産すること、このことに尽きる。それでは如何にすれば、社会を構成する人民全体に行き渡る日常の生活物資の総量を増大させることができるか。これこそが、スミスが自らに課した中心問題なのである。<sup>17</sup> 次にそれを検討してみよう。

- (1) 高島善哉『アダム・スミス』（岩波新書）、二〇〇四年、七三頁。
- (2) *TMS*, p.149. 邦訳、二六一―二頁。
- (3) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R.H. Campbell and A.S. Skinner, Glasgow Edition, 1976, Vol.I, p.10. (以下、WNと略記)、大河内一男監訳『国富論』1、中央公論社、一九七六年、一頁。(以下、邦訳と略記。ただし訳文は必要に応じて変更した箇所がある。)
- (4) 大道安次郎、前掲書、四六―七頁。
- (5) 水田洋『アダム・スミス』（講談社学術文庫）、二〇一二年、一一九頁。

- (6) WN, I, p.428. 邦訳、Ⅱ、七五頁。
- (7) 黒須純一郎『中流階級の経済学』、北樹出版、二〇〇九年、一五五頁。
- (8) 藤本武『イギリス貧困史』（新日本新書）、二〇〇〇年、一二頁。
- (9) 堂目卓生『アダム・スミス』（中公新書）、二〇〇八年、一二頁。W・J・リーダー『英国生活物語』（小林司・山田博久訳）、晶文社、一九八三年、第三章を参照。
- (10) Cf. Liza Picard, *Dr. Johnson's London-Life in London 1740-1770*, 2000, pp.123-4. E.Royston Pike, *Human Documents of Adam Smith Time*, 1974, pp.63-4. デイビッド・ダビディーン『大英帝国の階級・人類・性：ホガースにみる黒人の肖像』（松村高夫・市橋秀夫訳）、同文館、一一五―一六頁を参照。
- (11) WN, I, p.96. 邦訳、Ⅰ、一三三―一四頁。
- (12) WN, I, p.207. 邦訳、Ⅰ、三二〇頁。
- (13) WN, I, p.133. 邦訳、Ⅰ、一九四頁。
- (14) WN, I, p.97. 邦訳、Ⅰ、一三四―三五頁。
- (15) WN, II, pp.784-5. 邦訳、Ⅲ、一四六―四七頁。
- (16) 植村邦彦、前掲書、四九頁。
- (17) E・ロイストン・バイク『アダム・スミス』（中村恒矩・竹村孝雄訳）、法政大学出版社、一九七一年、七頁。

#### 四 経済成長の目的

何度も繰り返すように、スミスは貴金属が富であるとする重商主義的富の理解の仕方を大きく転換させて、人々の日常生活で消費する生活物資こそが富であること、そしてそれらは年々生産され、年々消費されるものであるから、



富は人々の年々の労働によって作られなければならないことを明確に示したのである。そこでスミスにあっては、社会の大多数の貧しい人々を救済するためには、国民の富（生活物資）が増大すること、すなわち経済成長が最重要課題になってくる。国民の富の増大すなわち経済成長があつてはじめて、「社会の圧倒的大部分を占める労働貧民」の生活条件を改善すること、つまり人民Ⅱ国民大衆の福祉向上が達成されるのである。

だとすれば、その富を増大させる要因は何か。スミスによれば、分業と市場の拡大と資本蓄積である。富をもたらす分業、その分業がなされるためには、前もつて資本が蓄積されていなければならず、また分業の成果である商品に対して市場が存在しなければならぬ。これら三つの要因の発展と増大によつて、労働生産性が向上にしたがつて「富裕が一般に、社会のさまざまな階級のすべてに行き渡るのである」<sup>(1)</sup>。

分業が生産性を向上させるのは、職人・労働者の技巧の増進、仕事間移動の時間的ロス<sup>(2)</sup>の節約、機械の発明の三つの事情<sup>(2)</sup>、つまり生産の専門化（特化）によるものだが、分業そのものを発展させるものは、スミスにあっては、分業の結果を見通した人間の英知の所産ではなく、人間本性の中にある「ある物を他の物と取引し、交易し、交換しようとする性向」<sup>(3)</sup>つまり「交換性向」に基づくものである。「この性向は、すべての人間に共通なもので、他のどんな動物にも見出されないものである」<sup>(4)</sup>。「犬同士が、一本の骨を別の骨と、公正に、しかも熟慮のうえで交換するのを見た人は誰もいない」<sup>(5)</sup>。さらに人々を交換に導き入れ、したがつて専門化を生じさせるのと同様の心理的傾向によつてまた、人々の相互依存関係が生じ、市場経済の網の目のような複雑な社会機構が形成されるのである。

ところで、まさに交換が専門化と分業を生み出すように、スミスによれば「この分業の広がりには、つねに市場の広さによつて制限されるにちがいない」<sup>(6)</sup>。そして「取引し、交易し、交換するという一般的性向のおかげで、人間のそ

それぞれの才能が生みだすさまざまな生産物は、いわばひとつの共同の資材となり、誰でもそこから、他の人々の才能の生産物のうち自分の必要とするどんな部分でも購入することができるのである<sup>⑦</sup>という。このような共同の資材のもとに分業が発展するとすれば、共同の資材を取り入れられる範囲によって、つまり市場の広さによって、分業の発展が制限されることは当然であろう。市場が拡大すればするほど、それは分業を刺激する。市場が小規模ならば、誰も一つの生産物だけを生産すると言うわけにはいかないのである。

これに関してスミスは、スコットランドの事例を引き合いに出す。「スコットランドのハイランドのような人里離れた地方に点在する孤立した家々や小さい村々では、農業者は誰も自分自身の家族のために、肉屋にもなり、パン屋にもなり、また酒屋にもならなければならない<sup>⑧</sup>。」「スコットランドのハイランド地方の僻遠の内陸部では、釘作りのような職業ですら、一個の職業となりえない<sup>⑨</sup>。」作業内分業によって「一日に千本の割りで釘を作る職人は、一年に三百日働くとして、年に三〇万本の釘を作ることになる<sup>⑩</sup>」が、市場のないところでは、一年かかって千本、つまり一日分の製品を売り捌くことすら不可能である。しかし市場が拡大すれば、職人たちは専門化し、それによって能率の向上という利点を得ることになる<sup>⑪</sup>。市場が拡大すればするほど専門化が進み、生産性が向上し、富は増大し、社会の富裕化が達成される。このような経済成長は、節約によって蓄積され、生産力をさらに高め、専門化と市場の拡大をなお一層進めるのに用いられる資本が大量になれば不可能である。こうしてスミスにあっては、資本蓄積が経済の拡大、したがって経済成長の鍵であると考えられたが、重要なことは、その資本蓄積のプロセスは、もっぱら資産の保全にかかっていることである。資産の保全のないところでは、資本蓄積のプロセスは作用しないのである。スミスはこう主張する。

「生命財産が一応保証されているすべての国では、普通の理解力のある人なら誰でも、自分が支配しうる資財がどんなものであるかと、現在の楽しみか将来の利潤のどちらかを手に入れるために、その資財を用いようと努めるであろう。……生命財産が一応保証されているところでは、自分の支配するすべての資財を、……用いないとすれば、その人は正気な人間とは言えない。人々が自分より目上の者の暴力をいつも恐れているような不幸な国では、人々はその資財の大部分を埋めたり、隠したりする場合が多い。……こうしたことは、トルコやインドでは普通行われていると言われるが、アジアの大抵の国でも確かにそうだと思う。わが祖先たちの間でも、封建的な統治が狂暴に行われていた時代には、これは普通の慣わしであったように思われる。」<sup>12</sup>

ところでスミスによれば、資本蓄積が進展するとともに経済成長が達成されていき、社会が富裕化していくが、それには順序があるという。『国富論』第三編第一章「富裕になる自然の進路について」の中で、彼は社会が富裕化する順序について述べている。それによると産業においては、最初に農業の進歩があり、次に製造業が発展し、最後に外国貿易が発展する。これが「自然的順序」だとし、しかもこの自然的順序は、人為的な干渉のない自由な経済活動によって達成されるのである。<sup>13</sup> なぜなら「利潤が等しいか、もしくはほぼ等しいなら、大半の人は自分の資本を、製造業や外国貿易に投下するよりも、むしろ土地の改良の耕作に投ずる方を選ぶ」<sup>14</sup> からである。というのも「土地に資本を投ずる者は、貿易商人に比べて、その資本を身近で監視し、支配することができ、資産が不慮の事故に会うこともずっと少ない」<sup>15</sup> からである。つまり人間のもつ自然の性向から言えば、人間は最も安全確実な場所に投資するのである。それは何かと言えば、農業にほかならない。したがって農業の進歩が最初に起こり、次に製造業が続き、外国貿易が最後に発展する。これが自由な経済活動の帰結なのだ。

だがスミスが農業を重視する、もう一つの理由は、生活資料が他の生産物に優先しなければならないと言うことである。スミスの言い分はこうである。「生活資料は、事物の性質から言つて、便益品や奢侈品に先立つて必要だから、前者を得るための産業は、後者を満たす産業に当然優先しなければならない。そこで、生活資料を提供する農村の耕作と新農法による改良とは、必然的に、便益と奢侈の手段を作りだすにすぎない都市の発達に先行しなければならないわけである。農村の余剰生産物のみが、つまり耕作者の生活維持に必要な分を超えるもののみが、都市の生活資料となるのだから、都市は、この余剰生産物の増加なくしては発展できない<sup>16)</sup>と。したがつて都市の産業の発展は、農業の発展に規定されるのだ。農業は「鍛冶工、大工、車大工、犁製造人、石工、煉瓦積み工、鞣皮工、靴工、仕立職工<sup>17)</sup>」を必要とし、そうした人々を生みだすが、彼らは次第に、都市の発達に一役買うことになる。「都市は、農村の住民が彼らの未加工の原生産物を製造品と交換するために集まってくる、絶えず開かれる大市あるいは週市のようなものである<sup>18)</sup>」。

こうしてスミスは産業においては、最初に農業、次に製造業、そして最後に外国貿易と発展するのが自然的順序だとするが、さらに、この順序に従えば、農村の発展は都市の成長をもたらし、都市は農産物の一大市場を提供することになる。そして都市と農村が一体となった社会の発展によつて、商業と海運の機会が拡大され、遠距離の外国貿易が促進される。生産力の拡大とともに人口は増加し、これにより市場の拡大が一層促進され、専門化と資本蓄積がさらに一層刺激される。こうしたプロセスを経て、経済は次第に、高水準の発展<sup>11)</sup>経済成長へと前進し、それとともに社会が富裕化し、あらゆる階層の生活水準を引き上げる、つまり国民的富裕の社会が実現し、その結果、人民の福祉向上が達成されることになる。

このように見てくると、スミスの意図した経済成長は、窮乏生活に喘ぐ貧困層を救済するためであったことが分かるのである。それ故スミスにとって、経済成長は「社会の圧倒的大部分を占める労働貧民」の生活条件の改善につながる、つまり人民の福祉向上に役立つから、何としても達成されなければならないものであった。だが、人民の福祉向上に寄与する経済成長の達成は、当時ほとんど不可能に近かった。なぜなら現実の産業発展の歴史は、スミスの理想とする方向から著しく、かけ離れたものであったからだ。次にそれを見よう。

- (1) WN, I, p.22. 邦訳、I、二二頁。
- (2) WN, I, p.17. 邦訳、I、一五―一六頁。
- (3) WN, I, p.25. 邦訳、I、二四頁。
- (4) WN, I, p.25. 邦訳、I、二四頁。
- (5) WN, I, p.26. 邦訳、I、二五頁。
- (6) WN, I, p.31. 邦訳、I、三一頁。
- (7) WN, I, p.30. 邦訳、I、三〇頁。
- (8) WN, I, p.31. 邦訳、I、三一頁。
- (9) WN, I, p.32. 邦訳、I、三二頁。
- (10) WN, I, p.32. 邦訳、I、三二頁。
- (11) D・D・ラファエル、前掲訳書、五八頁を参照。
- (12) WN, I, pp.284-5. 邦訳、I、四三三―四頁。
- (13) WN, I, p.380. 邦訳、II、一〇頁。

- (14) WN, I, p.377. 邦訳、Ⅱ、六頁。
- (15) WN, I, p.377. 邦訳、Ⅱ、六―七頁。
- (16) WN, I, p.377. 邦訳、Ⅱ、五頁。
- (17) WN, I, p.378. 邦訳、Ⅱ、七頁。
- (18) WN, I, p.378. 邦訳、Ⅱ、七―八頁。

## 五 理不尽な重商主義の諸政策

実際、ヨーロッパ史のプロセスの中では、不幸にもスミスの理想とする産業発展の自然的順序は、逆転されてしまった。スミス自身は「この事物自然の順序は、領土を有する社会であれば、どこでも、ある程度は起つたに違いないのだが、ヨーロッパのすべての近代国家においては、この自然な順序が多くの点で全く逆転されてきている」と述べている。そこでは第一に外国貿易が優先され、その結果として製造業が生みだされ、それが次に農業の主要な改良を生ぜしめたのである。当時、事物の自然的順序を妨げていたものは、長子相続制度や限嗣相続制度、それだけでなく同業組合、徒弟法、定住法などがそうであったし、何よりもスミスが「商業の体系」と呼んだ、いわゆる重商主義とその諸政策であった。不自然で逆行的な順序を採ったのは、スミスによれば、まさに重商主義の諸政策であり、これは当時の政府が人為的に導入した政策にすぎないのである。

本来、外国貿易が生じてくるのは、国内で十分な生産が確保され、国内の需要を超過する余剰が生じたときである。外国貿易は、あくまで余剰生産物の交換にすぎない。この点「あらゆる社会で、いつの時代にも、原生産物および製

造品双方の余剰部分、つまり国内で需要のない部分は、国内で需要のある物資と交換するために、国外に送られねばならない<sup>②</sup>」とスミスは述べている。彼が重商主義を批判したのは、それが外国貿易だけを偏重し、国内経済を軽視しているからであった。彼が最も重視するのは、海外市場⇨植民地市場ではなく国内市場であり、国内の経済活動の活性化なのである。もし重商主義の諸政策によって、無理やりに自然的順序を歪めなければ、必然的に資本が、まず国内に優先的に投下されるはずであり、非効率で且つ危険の多い遠距離の外国貿易に優先されることはなかったであろう。だが当時の富裕な貿易商人と政界が結託して、重商主義の諸政策をおし進めていったために、自然的順序が逆転してしまつたのである。

さて何度も述べたように、スミスにとって重商主義の誤りは、貨幣⇨貴金属を富と見なした点にあったが、その許しがたい不正は独立を抑圧し、依存を助長する独占にあった。スミスにあつては、「独占は特定の階級の人々に与える、ただ一つの利益のために、各種さまざまな方法で、その国の全般的利益を害するものなのである」<sup>③</sup>。彼は重商主義批判の結論の一つとも言うべき記述の中で、次のように述べている。すなわち「消費こそは、一切の生産にとっての唯一の目標であり、かつ目的なのである。したがって生産者の利益は、それが消費者の利益を促進するのに必要なかぎりにおいて配慮されるべきものである。……ところが重商主義政策においては、消費者の利益は、終始一貫して生産者の利益の犠牲に供されており、消費ではなく生産こそ、一切の工業や商業の究極の目標であり、かつ目的である、と考えられているように思われる」<sup>④</sup>と。スミスという消費とは、人々が独立しうるための生活状態への物質的条件の充実を意味する。一方、重商主義者の目論む生産とは、それによつて他人を支配し、抑圧することのできるような独占的権力の獲得を意味するのである<sup>⑤</sup>。それは、スミスの次の記述からも窺い知ることができるであろう。「わが

国の重商主義政策によって専ら奨励されているのは、富者や権力者のために営まれる産業であつて、貧者や赤貧者の利益のために営まれる産業は、余りにもしばしば無視されるか、または抑圧されるかのいずれかなのである。<sup>(6)</sup>

その上、重商主義政策から帰結する独占は、国内において、国民大衆の多数を抑圧する少数の特権階級の利益に奉仕するばかりでなく、国民間の離反と対立、帝国主義戦争の原因ともなるものであつた。すなわち「各国民は、自国と貿易するすべての相手国の繁栄を嫉妬の目をもつて見、彼らが利得すれば自分たちが損をするのだと見なすように仕向けられている。商業は、個々人のおけると同様、諸国民の間においても、その性質上、そもそも和合と親善の紐帯たるべきもののだが、その商業が、かえつて不和反目の最大の源泉になつてゐるのである」と。<sup>(7)</sup>さらにスマスはこう続ける。「軽薄な野心家の曇つた眼からすれば、独占こそは、謀略や戦争の修羅場で闘いとる価値ある、魅惑的な対象と思われるのも、しごく当たり前のことだろう。だが、よく考えてみれば、この目的物の眩惑的な光輝、すなわち、この貿易の計り知れない広大さこそ、その独占を有害なものにするのであり、そのために、独占のない場合に比べて、一国の資本のはるかに大きな部分を、他の大部分の用途に比べて、当然に利益の少ない用途に吸収させることになるのである。<sup>(8)</sup>」

だからスマスの目には、重商主義は間違つた政策体系と映るのだ。一般に、人間は馴染みの深い場所で経済活動を営みたいという気持ちがあり、これは危険を避け安全を求めるといふ人間のもつ自然の性向の帰結であるとスマスは考へている。そしてそのことが、資本を国内に投下し、国内経済の発展を促すのである。人々の自由な経済活動の結果として、資本は最初に、国内に投下され、国内の経済活動を活発にし、社会を富裕にする。

スマスは次のように述べている。「各個人は、自分の自由にできる資本があれば、その多少を問わず、それをもつ



と有利に使おうといつも努力するものである。……誰でも、自分の資本をできるだけ手近な場所で、したがって、できるだけ自国内の勤労活動の維持に使おうとするものである。……利潤が同等か、ほとんど等しいなら、あらゆる卸売商人は当然に、国内消費向けの外国貿易よりも国内商業を選ぶ。……国内消費向けの外国貿易の場合には、彼の資本は、長期に亘って、彼の視野外に去ってしまうことがしばしばあるが、国内商業にあつては、彼の資本が、それほど長期間、彼の視野を離れることはない。<sup>9)</sup>さらにスミスは「商人の母国は、各国の住民の資本がたえずその周りを循環している中心であり、特別の原因によつて、ときにこの中心からはじき出されて遠方での仕事に追いやられることはあるにしても、諸資本が常に集まつてこようとしている中心である<sup>10)</sup>」と言う。したがって人々に自由な経済活動を保証すれば、人間の自然の性向からして、人々の経済活動をまずは彼の「近隣の場所」、「確実な場所」で行なうよう自然に誘導するのである。だから重商主義の諸規制を撤廃し、スミスのいわゆる自然的自由のシステムが確立されるならば、自ずから資本は国内に集まつてきて、国内経済が活性化することによって国民的富裕の社会が実現し、人民の大多数に大きな経済的利益を与えることができると同時に、生活条件の改善つまり人民の福祉向上に役立つであろう。スミスはこう力説するのである。そして重商主義批判の書としての『国富論』全編の結論は、「人民の大多数にとつて、利益どころか、もっぱら損失のみだった」植民地貿易独占を放棄し、「大西洋のかなたの一大帝国の保持」という「計画そのものを捨てよ」と言うものであつた。<sup>11)</sup>

(1) W.N., I, p.380. 邦訳、Ⅱ、一〇頁。

(2) W.N., I, p.379. 邦訳、Ⅱ、九頁。

- (3) WN, II, p.613. 邦訳、Ⅱ、三八三頁。
- (4) WN, II, p.660. 邦訳、Ⅱ、四六四―六頁。
- (5) 岡田純一『増補 経済学における人間像』、未来社、一九六八年、第一部を参照。
- (6) WN, II, p.644. 邦訳、Ⅱ、四三八頁。
- (7) WN, I, p.493. 邦訳、Ⅱ、一八四―五頁。
- (8) WN, II, p.628. 邦訳、Ⅱ、四〇六頁。
- (9) WN, I, p.454. 邦訳、Ⅱ、一一六―七頁。
- (10) WN, I, p.455. 邦訳、Ⅱ、一一八頁。
- (11) WN, II, p.947. 邦訳、Ⅲ、四三九頁。

## 六 むすびにかえて

今まで論じてきたように、スミスが道徳哲学講義において、第一部門の自然神学から第四部門の経済学へと移行していったのは、まさに貧困に喘ぐ貧困層の救済のためであったことを忘れてはならないだろう。そしてこの目的の根底には、彼の幸福論が横たわっていた。彼の幸福観は平静と享樂、つまり精神的要素と物質的要素とから成り、前者がプリマートを占めているが、後者もまた構成要素として認められるのであり、この後者こそ経済学へつながるものであったのだ。当時、重商主義体制の下で、享樂という物質的要素Ⅱ生活物資を欠くことによつて、社会の大多数の人民にあつては現実の幸福、平静な境地は、著しく妨げられている状態にあつた。したがつて幸福達成のために、経済的なものを尊重する必要があることを、スミスは積極的に主張したのである。

『国富論』でスミスが目指した国民の富の増大つまり経済成長は、人民大衆の生活物資を増産するためであり、決して重商主義的富貴金属をかき集めるためではなかった。なぜなら、当時のイギリスは圧倒的な生活物資の不足状態であり、その状態を打開するためには経済成長が必要だったからである。だからスミスが意図した経済成長は、貿易商人や製造業者にとつての単なる金儲けではなく、あくまで困窮している人民の生活状態を可能なかぎり改善するためであった。いわば貧困層の生活水準の向上、衣食住の向上のための経済成長であった。そして経済成長の要因は、スミスにあつては、分業と市場の拡大と資本蓄積であつたのだ。だが、これを阻害するものとして、スミスが何よりも、やり玉に上げたのは「商業の体系」である重商主義体制であつた。この経済体制は、一部の独占的生産者、富裕な貿易商人の利益にこそなつており、大勢の人民、消費者の利益になつていない、こうスミスの目に映つたのだ。

また経済成長が軌道に乗れば、雇用機会が増え、失業者が減少する。人は失業すると経済的苦境に陥ると同時に、精神的苦痛も味わう。たとえ本人に責任はなくても、世間は失業者を軽蔑し否認する。スミスは貧困者や下賤の者を軽蔑したり、あるいは無視したりする人間の道徳的腐敗を次のように痛烈に批判している。「富裕な人々、有力な人々に感嘆し、ほとんど崇拜し、そして貧乏で卑しい状態にある人々を軽蔑し、少なくとも無視するという、この性向は、……われわれの諸道徳感情の腐敗の、大きな、そして最も普遍的な原因である。」<sup>1</sup> したがって、世間から軽蔑の目で見られている貧困状態に陥つた失業者が、幸福を手に入れることは困難である。だから人民の幸福を考えれば、失業者を減らさなければならぬ。そしてそのためには、雇用機会を増やすことが必要で、それには経済成長が必要なのである。

しかし併せて、次のことも指摘しておきたい。経済成長の結果、富者がますます裕福になり、貧者がますます貧困

になる格差社会が生じてしまうことも、スミスは十分に承知していた。だが格差社会が生ずるからと言って、富が増加しなくてよいのか。格差社会が生じても貧困者が救済される社会と、人民のほとんどが貧困状態にある社会と、どちらが善なのか。スミスは社会の格差が発生することは認めながらも、その上で次のように言及している。「文明国の最も下層の者でさえ、何千人という多数の助力と協同がなければ……彼が普通もっている家具道具さえ、提供されないことが分かるだろう。確かに、身分や地位の高い人々の法外な贅沢に比べると、彼の家財道具は疑いなく大いに単純で手軽に見えるに違いないが、それでも、ヨーロッパの王侯の家財道具が勤勉で儉約な農夫のそれを越えている度合は、必ずしも後者の家財道具が何万もの裸の未開人の生命と自由との絶対的支配者であるアフリカの多くの王のそれを越えているほどでないと言うことは、恐らく、真実だろう。」<sup>(2)</sup>

引用文に見られるように、文明国Ⅱ文明社会では最も貧しい人々でさえも生活物資や消費財を入手できる。確かに王侯貴族など地位の高い人士は、ずっと贅沢な暮らしをしており、それに比べると貧しくは見えるだろう。しかし、その王侯貴族と庶民の格差は、文明国よりも未開国Ⅱ未開社会の方がより大きいだろう。こうスミスは言うのである。同様の趣旨のことは法学の講義ノート（Bノート）でも、文明社会における所有の重大な不平等にもかかわらず、富裕が行き渡っていくことを強調し、「ブリテンの普通の日雇い労働者ですら、彼の生活様式において、インディアンの酋長よりずっと贅沢なのである」<sup>(3)</sup>と述べている。経済成長が見られ発展している文明国でも格差は存在する。経済が未発達な未開の国では、もっとひどい格差があるのだ。そうならば、経済成長があり、発展している社会で格差が拡大するという批判は、当を得ていないことになる。<sup>(4)</sup>

人民の生活の安定・向上、福祉向上の観点から言っても、生活物資の入手できない未開国より、経済成長が見られ

貧困者でもある程度の生活物資が入手できる文明国の方が、望ましいのである。言い換えれば、文明国では階級的な貧困、労働生産物の不平等な分配の存在を認識しながらも、それにもかかわらず、分業に基づく高い生産力<sup>(5)</sup>によって経済成長が達成され、人民一人ひとりの豊かさが一般化すると言うことにスミスは力点を置いているのである。『国富論』<sup>(5)</sup>と言え、当時主流だった重商主義体制への痛切な批判や、経済の自立メカニズムを解明した点が主に注目される。このことにも一理ある。だがもう一つ、スミスが『国富論』を書いた根底にあったのは、国民の富<sup>(5)</sup>人民の日々の暮らしの生活物資を増やすため、経済成長を軌道に乗せて、貧困層を救済することであった。そしてそれは、人民の生活の安定・向上、福祉の充実、要するに人民の幸福達成に役立つからであった。このことは忘れてはならないであろう。

- (1) TMS, p.61. 邦訳、九五頁。
- (2) WN, I, pp.23-4. 邦訳、I、二二―二三頁。
- (3) Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence*, edited by R.L.Meek, D.D.Raphael and P.G.Stein, Glasgow Edition, 1978, p.489. 水田洋訳『法学講義』、岩波文庫、二〇〇五年、二六九頁。
- (4) 田中正司『アダム・スミスと現代』、御茶の水書房、二〇〇〇年、四二―三頁、木暮太一『いまこそアダム・スミスの話をしよう』、マトマ出版、二〇一一年、一二二―四頁、内田義彦『新版 経済学の生誕』(前出)、一七八―一八四頁を参照。
- (5) 植村邦彦、前掲書、五七頁。

